

平成二十七年夏

全国大学国語国文学会 第一二一回大会案内・要旨集

期日 六月六日(土)・七日(日)

会場 大東文化会館

(東京都板橋区徳丸二丁目二一)

平成二十七年夏夏季 全国大学国語国文学会 **第一二一回大会案内**

○同封の葉書に出欠をご記入の上、五月二十五日(月)までに必ず着くようにご返送ください(欠席の場合も必ずご返送をお願いします)。

○六月六日(土)の、昼食代(一、〇〇〇円/委員のみ)、懇親会費(一般・六、〇〇〇円、大学院生・四、〇〇〇円)、レジユメ資料代(一、〇〇〇円)、六月七日(日)の昼食代(一、〇〇〇円)は、同封の郵便振替用紙(口座番号/〇〇一六〇―四―六九六〇八四、口座名称/全国大学国語国文学会平成27年度夏季大会実行委員会)にて五月二十五日(月)までにお振り込みください。

○大会についてのお問い合わせは、左記の大会担当までお願いします。

〒175―8571 東京都板橋区高島平一―九―一
大東文化大学外国語学部 蔵中しのぶ研究室
Eメール zenkoku.daito2015@gmail.com

○同封した選挙告示の通り、本大会では委員等の選挙が行われます。会場で手続きの上ご投票ください。

○出張依頼状が必要な方は、提出先の宛名と送り先を明記の上、左記の当学会事務局へお申し出ください。

〒370―1193 群馬県佐波郡玉村町上之手一三九五―一
群馬県立女子大学文学部国文学科北川研究室内
全国大学国語国文学会事務局

Eメール zenkoku.gpwu2014@gmail.com
FAX 〇五〇―二七三〇―〇〇八六

第一日 平成二十七年六月六日(土) 大東文化会館(東京都板橋区徳丸二―四―二二) 東武東上線東武練馬駅から徒歩二分

常任委員会(11時00分～11時30分)
委員会(11時30分～12時30分)

委員等選挙 投票日時 六月六日(土) 12時30分～17時30分 投票会場 大東文化会館ホール前

大会

受付 12時30分～

開会 13時00分

会場 大東文化会館ホール

総合同会／本学会常任委員・宮城学院女子大学名誉教授

本学会会長・京都市立芸術大学名誉教授

大東文化大学学長

犬飼 公之

中西 進

太田 政男

開会の辞

会長挨拶

会場挨拶

公開シンポジウム(13時10分～17時00分)

テーマ シルクロードの東と西をむすぶ―文学・歴史・宗教の交流―

基調講演(13時10分～15時10分)

日本近現代におけるシルク・ロードへの関心―国際戦略と学術の動き―

国際日本文化研究センター名誉教授

鈴木 貞美

タヌーヒーの『イスラム帝国夜話』―初期イスラム社会の世相を切りとる―

東大寺長老

森本 公誠

パネルディスカッション（15時30分～17時00分）

パネリスト

フランス東方学院教授
フレデリック・ジラール
國學院大學名誉教授・横浜市歴史博物館長
鈴木 靖民
中国・南開大学客員教授
辰巳 正明
大東文化大学教授
藏中しのぶ
司会

懇親会（18時00分～20時00分）

会場 大東文化大学板橋キャンパス「グリーン・スポット」
会費 一般 六、〇〇〇円 大学院生 四、〇〇〇円

※懇親会終了後、東武東上線「東武練馬」行き学バス運行

第二日 六月七日（日） 受付開始9時 大東文化会館

研究発表会《A会場》 会場 大東文化会館ホール

午前の部（9時30分～12時20分）

総合司会／本学会常任委員・國學院大學栃木短期大学教授

塚越 義幸

大津皇子の漢詩と聯句体詩―上代日本漢詩における柏梁体詩をめぐって―

発表者／國學院大學大学院特別研究員

大谷 歩

司会／青山学院大学教授

小川 靖彦

好去好来歌の性質

発表者／大阪府立大学客員研究員・佛教大学非常勤講師

小田 芳寿

司会／東洋大学教授

菊地 義裕

〈休憩〉

『うつほ物語』「祭の使」巻における催馬楽引用―「声振り」に注目して―

発表者／早稲田大学大学院生

司会／白百合女子大学教授

山崎 薫

室城秀之

女三の宮の十二人の女房―『源氏物語』「若菜下」巻の密通をよびおこすもの―

発表者／フェリス女学院大学大学院生

司会／國學院大學教授

佐藤 洋美

秋澤 亘

昼食・休憩（12時20分～13時20分）

午後の部（13時20分～15時30分）

総合司会／本学会常任委員・國學院大學栃木短期大学教授

塚越 義幸

大江朝綱「男女婚姻賦」の主題と方法―白行簡「望夫化為石賦」―「天地陰陽交歡大楽賦」の影響―

発表者／大東文化大学大学院生

司会／國學院大學栃木短期大学教授

馮 芒

塚越義幸

看聞日記紙背連歌懷紙の訂正について―本文異同と式目をめぐる問題―

発表者／お茶の水女子大学大学院生

司会／日本大学教授

生田 慶穂

藤平 泉

〈休憩〉

『諸国百物語』論―「後妻うち」の系譜を通じて―

発表者／早稲田大学大学院修了

司会／慶應義塾大学教授

塚野 晶子

津田 眞弓

研究発表会《B会場》

会場 大東文化会館講義室K-0404

午前の部 (9時30分～12時20分)

総合司会／本学会常任委員・弘前大学教授

郡千寿子

坪内逍遙『内地雜居未来之夢』―中絶の意味するもの―

発表者／早稲田大学大学院生

清水 徹

司会／元和洋女子大学教授

木谷喜美枝

片山廣子の短歌―佐佐木信綱・芥川龍之介・堀辰雄との交流を巡って―

発表者／東洋大学大学院生

清水麻利子

司会／岩手県立大学盛岡短期大学部教授

松本 博明

〈休憩〉

〈ひめゆり〉をめぐる物語の考察―〈乙女〉の系譜を手がかりに―

発表者／早稲田大学大学院生

柳井 貴士

司会／駒沢女子大学特任教授

松村 良

遠藤周作の日本人基督者としての思想―『王国への道』を中心に―

発表者／和洋女子大学大学院研究生修了

栗林 莉花

司会／フェリス女学院大学教授

佐藤 裕子

昼食・休憩 (12時20分～13時20分)

午後の部 (13時20分～15時30分)

総合司会／本学会常任委員・弘前大学教授

郡 千寿子

〈偶然〉から〈偶有〉へ―東浩紀『クオンタム・ファミリーズ』論

発表者／早稲田大学大学院生

加藤 夢三

司会／駒沢女子大学特任教授

松村 良

和歌の表現の巧みさをどのように翻訳するか―『万葉集』の一首の和歌における同音異義語のはたらきを例に

発表者／京都工芸繊維大学教授

ジュリー・ブロック

司会／國學院大學兼任講師

城崎 陽子

〈休憩〉

多義的な性格をもつ「してしまふ」について

発表者／台湾・靜宜大学助理教授

迫田 (呉) 幸栄

司会／千葉大学教授

岡部 嘉幸

総会 《A会場》 (15時40分～16時40分)

授賞式 [全国大学国語国文学会賞／文学・語学賞／研究発表奨励賞]

閉会の辞

本大会実行委員長／本学会常任委員／大東文化大学教授

藏中しのぶ

平成二十七年夏夏季

全国大学国語国文学会 第一二一回大会 公開シンポジウム

シルクロードの東と西をむすぶー文学・歴史・宗教の交流ー

昭和のシルクロード・ブームから三五年が過ぎ、二〇一四年には「シルクロード…長安く天山回廊のルートネットワーク」が世界遺産に登録された。中国・カザフスタン・キルギルスタン三国共同の申請であったため、日本国内ではあまり報道されず、日本が申請した「富岡製糸場」の登録が大きな話題となった。生糸を生産する「富岡製糸場」によって、シルクロードは奈良を越え、富岡にまで延長されたともいわれている。

シルクロードをさらに西の「香料の道」へと延ばし、地中海世界につなげていこうとする構想もある。東に延長すれば、日本の沖の島、太宰府を経て奈良にいたる古代遺跡を連結する「仏教伝播の道」「海のシルクロード」への可能性も秘めている。

シルクロードの先には何があるのか？シルクロードから何が見えてくるのか？

来年度の本学会60周年大会シンポジウム「日本とインドー文化における普遍と固有」への展望を視野にいれ、このシンポジウムを企画した。

基調講演では、日本近現代文学の中国・西域への関心に焦点を当て、鈴木貞美氏には、明治期から宮沢賢治・保田与重郎・井上靖ら昭和戦前・戦後にいたる中国・西域ブームを解説していただく。

また、日本未紹介の10世紀のイスラム逸話集タヌーヒー撰『イスラム帝国夜話』の翻訳を手がける森本公誠師に、シルクロードの先、辺縁に位置するイスラムの文学から、改めて日本の宗教と文学を照らし出していただく。

歴史学では、近年、鈴木靖民氏が提唱する東部ユーラシア世界構造論をはじめとして、諸説が提起され、文学、宗教との関連の探究も待たれている。

ふたたび、シルクロードが脚光を浴びつつある今、これまでにない新たな視座から、シルクロードがむすぶ東西文化の交流を問い直す。

基調講演

日本近現代におけるシルク・ロードへの関心―国際戦略と学術の動き―
タヌーヒーの『イスラム帝国夜話』―初期イスラム社会の世相を切りとる―

国際日本文化研究センター名誉教授
東大寺長老

鈴木 貞美
森本 公誠

パネルディスカッション

パネリスト

フランス東方学院教授
國學院大學名誉教授・横浜市歴史博物館長
中国・南開大学客員教授
大東文化大学教授

フレデリック・ジラール
鈴木 靖民
辰巳 正明
藏中しのぶ

司会

平成二十七年夏夏季

全国大学国語国文学会 第一一一回大会

研究発表会

【研究発表会／A会場 午前】

大津皇子の漢詩と聯句体詩

—上代日本漢詩における柏梁体詩をめぐる—

國學院大學大学院特別研究員

大谷 歩

『懷風藻』に載る大津皇子の「七言 述志」の詩は、「天紙風筆 画雲鶴。山機霜杼織葉錦」（詩番6）とあり、この詩に「後人聯句」として「赤雀含書時不至。潜龍勿用未安寢」の詩が続く。この二首は七言二句体の形式を取り、『懷風藻』では特殊な詩体である。こうした七言二句体の詩は、古代中国の古詩或いは歌謡に多くみられる傾向にある。一方では漢代以降の〈柏梁体聯句〉詩に特徴的にみられ、漢・武帝の時の「柏梁詩」は聯句形式の起源とされている。梁・元帝「宴清言殿作柏梁体」は七言一句を三人で読み継ぐ形式であり、上座に続いて臣下などの座の者が句を継いでゆき、聯句の形式を踏んで詠まれている。大津皇子の詩に「聯句」が付属するのは、皇子の詩が聯句の座の詩であったことを予測させる。おそらく皇子の「述志」詩は、皇子を上座として季節の風景を愛でることをテーマとし、座の者によって詠み継がれたことが示唆されているのである。

しかし、皇子の「述志」詩に続く「後人聯句」は、皇子の詩の内

容を引き継ぐものではない。この詩には、皇子が潜龍のままに不遇の時を過ごし、安眠することのできない嘆きが詠まれている。この詩題の「後人」とは、皇子伝を記した編者とも想定されているが、皇子の詩に「聯句」を継いだ者は、大津皇子の事件に関わり、皇子の「述志」詩が聯句の場で詠まれていたことを知る人物であろう。その作者は、皇子の詩の内容に句を継いだのではなく、皇子の「述志」という詩題そのものに寄せて句を継いだものと推測される。

以上のことから、大津皇子の「述志」詩が特殊な詩体であるのは、中国古体詩の形式に倣ったものではなく、「後人聯句」という「聯句」が示唆するところから、皇子を上座とした〈柏梁体聯句〉の方法で詠まれたこと、かつ「後人聯句」は、皇子の「述志」という詩題そのものを受けて、皇子の「志」を新たに解釈した詩であることを結論として発表したい。

好去好来歌の性質

大阪府立大学客員研究員・佛教大学非常勤講師

小田 芳寿

好去好来歌は、旅立つ者に向かつての送別の歌である。左注「天平五年三月一日に、良が宅にして対面し、献るは三日なり。山上憶良謹上 大唐大使卿記室」から、旅立つ者は天平五（七三三）年発船の遣唐大使、丹比広成であり、山上憶良による広成への献歌であることがわかる。

これまで当該歌については、菊地義裕氏「憶良と丹比家―好去好来歌の献呈―」（『上代文学』第五三号、一九八四年十一月）『柿本人麻呂の時代と表現』二〇〇六年所収）や、藤原茂樹氏「大唐に在りし時本郷を憶ひて作る歌と好去好来歌」（『セミナー万葉の歌人と作品』第五卷、二〇〇〇年九月）をはじめ、「言霊」の機能の重要性を説く論が多く見受けられる。確かに、「言霊」の活動が長歌結

句の「障みなく幸くしましてはや帰りませ」と呼応して「言霊」の「幸はふ」状態を実らせようとしていると受けとめることができ、当該長歌において、「言霊」の機能性を考えることは重要であろう。

ただし、今少し踏み込んで考えなければならぬのは、「神代」、「皇神」、「高光る 日の大朝廷 神ながら 愛での盛りに」と神を歌い、さらに「天地の神」や「大国御魂」という様々な神を登場させ、その神々に加護を願うことを歌う点である。こうした点は、集中の遣外使節壮行歌には見られず、異質とさえいえる。そこで当該長歌の歌表現に即して分析を行い、神々を歌う必然性を明らかにする。

そうした考察を行ったうえで、様々な神を歌う点に、皇統の正統性を担い神格化された聖武天皇の威光に包摂されているにもかかわらず、普遍的な神に祈り、その神の威光に縋っていくありようを読み取るべきことを述べる。さらに、それは、渡唐体験のある憶良だからこそ歌うことが可能であったこともあわせて言及する。

『うつほ物語』「祭の使」巻における催馬楽引用

—「声振り」に注目して—

早稲田大学大学院生 山崎 薫

『うつほ物語』には、全四曲の催馬楽の引用が確認されるが、その中には催馬楽の楽曲の「声振り」を用いて和歌を「歌う」という、他の文学作品には見られない催馬楽の引用が三例ある。本発表では、その内の二例に当たる「祭の使」巻の催馬楽引用を中心に取りあげる。「声振り」は、『うつほ物語』以外に用例が確認できない語である。そこで、現存の『梁塵秘抄口伝集』、『部曲抄』に見られる、「振り」の語を手掛かりに、考察を行う。「振り」は、強弱や節回しといった、旋律を歌う際の細かな声の使い方であると考えられる。『うつほ物語』において、「声振り」の語は、催馬楽という歌謡のジャ

ナル全体にはなく、個々の催馬楽の楽曲に対して用いられており、和歌を楽曲の旋律に合わせて歌っているものと解釈される。それには、聞き手に、特定の催馬楽の詞章を想起させる狙いがある。「声振り」が用いられる場面において、詠者の意図を明らかにするためには、和歌と併せて、引用されている催馬楽の詞章の内容を詳しく検討する必要があると考える。

「祭の使」巻では、源正頼が催馬楽「我家」の「声振り」で和歌を歌う。従来、求婚者の藤原兼雅に対して、正頼が歓迎の意を示している場面だと捉えられてきた。しかし、ここでは「我家」の「大君来まさば」という詞章が引用されている。平安中期において、「大君」は、主に天皇、または天皇の子息を指す。正頼の念頭には、兼雅ではなく東宮を含む求婚者の皇子たちの存在があるのではないか。対して、兼雅は催馬楽「伊勢海」の「声振り」で和歌を歌う。兼雅は、歌語の「伊勢海」から連想される「深き心」が、他の求婚者にはないことを強調するが、これは正頼が暗に込めた、自分以外の求婚者への意識を読み取ったためだと考えられる。「声振り」により、催馬楽の詞章を響かせたこのやりとりは、あて宮の東宮入内の可能性を示唆するものとしても捉えうるのではないだろうか。

女三の宮の十二人の女房

—『源氏物語』「若菜下」巻の密通をよびおこすもの—

フェリス女学院大学大学院生 佐藤 洋美

『源氏物語』「若菜下」巻には、賀茂祭の御禊を翌日にひかえた四月十余日のこととして、「齋院に奉りたまふ女房十二人」の存在が記されている。この「十二人」の「女房」は女三の宮から齋院に奉られるのであるが、物語は、この十二人をはじめとした女房たちが御禊の準備におわれるため、女三の宮の「御前の方」が「人しげ

からぬ」状態となったことを語る。そして、その間隙をぬって乳母子小侍従の手引きによって、女三の宮と柏木の密通を描き出しているのである。

本発表では、密通の直前に「齋院に奉りたまふ女房十二人」の存在が語られることに着目する。この十二人の女房に関しては、古注釈においても「ことなる子細なし」、「誰ともなし」などと指摘されるだけで、どのような女房であるのか明確にされていないが、この女房たちの不在が密通の端緒となっていることを考えればその存在は看過できない。

女三の宮に仕える女房の中心的存在は乳母たちであったが、当該場面ではその姿はなく、乳母たちも齋院に奉られた十二人の中に含まれていたと考えられる。なぜ女三の宮のところから十二人もの主要な女房が奉られるのであろうか。そのことを考えるためには、このときの「齋院」がどのような人物であったかをおさえる必要がある。この「齋院」については物語に語られていないが、物語の状況や史実等をふまえ、朱雀院の皇女である可能性を提示する。そのうえで、女三の宮の十二人の女房が果たした役割を考え、さらに、その女房たちを奉らなければならなかった女三の宮の社会的な立場を明らかにする。

女三の宮は、朱雀院の愛情の深さゆえに權威を高められた皇女だといえるが、そのことによって女三の宮は独自の立場におかれることとなる。女三の宮の「十二人」の「女房」は、皇族を代表する女三の宮の尊貴性を示しつつ、密通へと進む物語展開を必然的なものとして語っているのであった。

【研究発表会／A会場 午後】

大江朝綱「男女婚姻賦」の主題と方法

― 白行簡「望夫化為石賦」「天地陰陽交歡大樂賦」の影響 ―

大東文化大学院生 馮 芒

大江朝綱の律賦に「男女婚姻賦」（『本朝文粹』巻一）がある。

律賦は、唐代に始まる賦の代表的なジャンルである。律賦の述作に際しては、平仄・対句が求められるが、特に押韻には厳格な制限がある。

平安朝の律賦は、唐代律賦の制限を忠実に継承しており、大曾根章介氏、松浦友久氏は、白居易の影響を指摘された。一方、白居易の弟である白行簡にも、律賦「望夫化為石賦」の作がある。大江匡房は、この賦を非常に高く評価した。にもかかわらず、白行簡が平安朝の律賦に与えた影響については、未だ十分に検討されていない。

本発表では、白行簡のふたつの賦「望夫化為石賦」「天地陰陽交歡大樂賦」が、大江朝綱「男女婚姻賦」に大きな影響を与えていることをあきらかにし、その主題と方法について考察を加える。

第一に、白行簡「望夫化為石賦」と大江朝綱「男女婚姻賦」の構成・詩句表現・技法を比較検討し、大江朝綱が「男女婚姻賦」の述作に際して、白行簡「望夫化為石賦」を出典とし模範としていたことをあきらかにする。

第二に、大江朝綱「男女婚姻賦」は、漢文学にめつたに見られない「性」に触れている。この一見大胆な発想は、白行簡「天地陰陽交歡大樂賦」を典拠とし、この賦から得られたことを論じる。

第三に、大江朝綱「男女婚姻賦」の出典である白行簡の賦は、史書においてどのような評判を得たかを提示することによって、唐代文学における白行簡の位置を論じる。

以上の考証により、大江朝綱の律賦「男女婚姻賦」は、唐代の文

学において流行の最先端をいく白行簡の賦「望夫化為石賦」「天地陰陽交歎大樂賦」の二作を深く学び、その主題と方法を援用したものであること、大江朝綱における白行簡の影響がきわめて大きかったことを論じる。

看聞日記紙背連歌懷紙の訂正について

—本文異同と式目をめぐる問題—

お茶の水女子大学大学院生 生田 慶穂

連歌には、単なる誤写とはいえない異同が存在する。例えば、句集・撰集への収録にあたって句形を直すことがあり、これは百韻と付句集とで鑑賞態度が異なるために起こる。他方、百韻・千句の諸本には、一句の出来栄えにさして影響しない異同が散見する。これらは指合（式目違反）にまつわる訂正とみられる。式目というルールをもつ連歌特有の問題だが、十分に議論が尽くされていない。そこで本発表は、看聞日記紙背連歌懷紙の訂正を考察し、本文異同を適切に扱う指針を示すことにした。

宮内庁書陵部蔵『看聞日記』紙背に連歌懷紙五十八巻が存する。応永期に遡る貴重な原懷紙で、作者は貞成親王とその近臣たちである。随所に訂正の跡があり、(一) 執筆の誤記訂正、(二) 宗匠の指示による訂正、(三) 指合を見つけやすくする訂正、(四) 指合の訂正、おおむね四つの型に分類できる。(四)を検討すると、去嫌・何句物等に抵触しないよう慎重に語句を改めており、式目遵守の意識が強く現れている。句を書き始めてから指合に気付き途中で筆を止めたらしき様子や、指合がそのまま残っている箇所も見受けられ、宗匠・執筆の裁量が窺われる。訂正の時点は、(ア) 次の句が付く前の段階、(イ) 次の句が付いた後あるいは連歌会が終了した後の段階(事後修正)が想定される。訂正前の前句と付句に同一の語句

を含む事例は確実に(ア)に該当し、当座で書き換えられたものと判明した。

以上の考察結果から、式目との関係を調査することによって、一定の条件を整えば連歌原懷紙の訂正の原因と時点を特定できると分かった。現存する連歌作品の大半は転写本で、原懷紙と条件が異なるが、式目に反する本文(指合)は初形、式目に適った本文は改変という点は動かさず、少なくとも異同の先後関係を確かめることが可能だ。式目運用の調査は本文校訂の基礎作業となり得るのである。

『諸国百物語』論—「後妻うち」の系譜を通じて—

早稲田大学大学院修士 塚野 晶子

『諸国百物語』は、延宝五年(一六七七)に京都菊屋七郎兵衛から刊行された。先学から、物語構成・展開の多くを既存の怪異小説に依拠していると指摘されているこの作品は、独自性に関しては、その評価が高いものではない。しかしながらこの作品は、先行作に多くを依拠しながら、脱唱導に起因する文芸化、娯楽性に関しては、高く評価されている。本発表では、『諸国百物語』の文芸的特質及び、近世怪異小説史の中の位置づけをいっそう明確にすることを目指した。そのため、『諸国百物語』において重要と目される「後妻うち」を扱った話を中心に取り上げ、典拠と目される話、『諸国百物語』成立以前、以後の近世怪異小説との比較を行った。その結果、従来は池田彌三郎氏により「先妻の怨念は、夫には向かわない。後妻に集中するのである。」と指摘されていたが、本発表では『諸国百物語』は、それ以前の近世怪異小説に比べ、前妻ないしは本妻の亡霊の怨嗟が、後妻ないしは妾に対するのと同等かそれ以上に、夫に対して向けられている話が多く見受けられることを述べたい。そして『諸国百物語』以降の近世怪異小説における「後妻うち」を

扱った話では、妾の存在に嫉妬した本妻が病死し、異形となって「後妻うち」を発動させるという話型が主である。『諸国百物語』に見られたような、「後妻うち」が前妻の身を害した後妻への復讐という要素を含む話型、夫の破約が「後妻うち」を発動させ、その為に後妻のみならず、夫も落命するという話型は見受けられず、話型の多様性に乏しい。以上から、『諸国百物語』における「後妻うち」を扱った話は、本作以前、以降と比べて、特徴的だと結論づけられる。

【研究発表会／B会場 午前】

坪内逍遙『内地雑居未来之夢』

—中絶の意味するもの—

早稲田大学大学院生

清水 徹

坪内逍遙の『内地雑居未来之夢』（晚青堂）は、明治十九（一八八六）年四月から九月にかけて、第一号（一冊）から第十号（十冊）まで出版されたが、その後中絶してしまった小説である。本作品の中絶の理由を逍遙は、「貴重な新聞紙を借用して」（『読売新聞』明治二十年四月九日）に五点あげている中で第三点に、「真の小説ハ現在若くハ過去を写すに止まるべし将来の事を小説に綴るハ決して稗史家の真面目に非ず」と指摘し、それ以前の「ヤヨ喃暫らく、白雪山人に物申さん」（『読売新聞』明治二十年一月二十一日）にも、「未来」といふ題を嫌ひたるに因るなり」と述べている。しかし、本作品中に描かれた内地雑居に伴う外国人の事件の大半は、当時新聞に報道されている内容と同じであり、逍遙が指摘しているような未来を予想して描かれた作品というよりも、執筆当時の社会状況を踏まえて描かれていた。

そこで、本作品を中絶した別の理由を考えてみたい。第一回から第九回までの構成は、菱野が支那人のスリを匿う英国貿易商人から殴打される事件や渥美の身の上起こる陰謀など内地雑居の問題点も浮き彫りにされ、逍遙がこれまでに書いた小説よりも多彩な趣向になっている。ところが、第十回の「政治家の小集会」では改進黨の主張を喧伝することに腐心し、「第十四回 市中の騷擾」において、日本人と支那人との軋轢を描写することで、政治小説になりつつあることを逍遙も認識していたために、中絶してしまったと考えられる。なぜなら、逍遙は「小説を論じて書生形気の主意に及ぶ」（『自由燈』明治十八年八月四日）において、政治小説を勸懲小説と同様に否定し、「投書欄内を借用して妹と背鏡の読者諸君に白す」（『読売新聞』明治十九年十月五日）においても、事件などの事実関係については、小説家が書かなくとも歴史家が書けばよいと主張していたからである。

片山廣子の短歌

—佐佐木信綱・芥川龍之介・堀辰雄との交流を巡って—

東洋大学大学院生

清水麻利子

片山廣子は歌人としてよりも、芥川龍之介の最後の恋人「越び」として語られることが多かったのではないだろうか。『翡翠』『野に住みて』の二冊の歌集を残した。内面を凝視した、今でも古びない感性を持つ短歌は、まだ十分には評価をされていない。一方では、アイルランド文学翻訳家の松村みね子の名で知られ、森鷗外、上田敏、菊池寛らから絶賛される実力であった。歌人としての歩みと、歌壇の展開の中の廣子の短歌の特質を明らかにするために、佐佐木信綱・芥川龍之介・堀辰雄との交流を巡って考察したい。佐佐木信綱記念館（三重県鈴鹿市）所蔵の片山廣子の書簡と歌稿

から、師の佐佐木信綱に見守られながら、文学者として成長していく姿が見えてくる。輝かしい活躍をしながら、翻訳も短歌を詠むことも止めてしまい、晩年になって再開した。止めた時期は、芥川の自死と符合する。芥川の旋頭歌「越びと」と、芥川と廣子をモデルにした堀辰雄の小説をどのように受け止めていたのか。廣子の短歌から読み解くことができる。母校である東洋英和女学院へ寄贈された廣子の蔵書の中には、芥川や堀からの署名入りの著書もある。蔵書には、廣子の短歌世界を形作ったものが含まれていると考える。

廣子は西洋的で自由な気風の教育を受け、「とらわれぬ我」でありたいと願いつつ、多くの別れと戦争と生活の困難を越えていく。若い頃の夢想的な思索の歌は、客観的な平常心の歌へと変わっていった。「清新といふことが詩歌の精神である」とした佐佐木信綱は、廣子の歌を「清新」と評し、短歌を詠み続けるように励ます。「歌人もひろく視野を広げねば」と、『心の花』に廣子の翻訳を多く掲載する。信綱との長きにわたる師弟関係こそが、廣子の歌も夢をも育ててきたと言えるであろう。

〈ひめゆり〉をめぐる物語の考察——〈乙女〉の系譜を手がかりに——

早稲田大学大学院生 柳井 貴士

「ひめゆり」部隊に関する書物は数多く出版されている。本論ではその物語生成の初期の書物、すなわち与那城勇「ひめゆりの塔」(『ゴスペル』一九四九年五月)、三瓶達司の聞き書き(『具志の青嶺——沖繩捕虜収容所の中から——』近代文芸社、一九八三年三月)などを参照に(純粋)〈無垢〉〈乙女〉という表象が生成される背景を最初の分析の対象とする。女性の役割り、〈男性／将校兵士〉の見る眼差しを同時期の沖繩戦記からひろい、そこで期待される〈女性像〉の戦時下／戦後の差異と同位を考察することで、期待される

〈女性像〉の表象への欲望を見出す。その際には、広島・長崎の「原爆乙女」を参照とすべきであろう。

また石野径一郎の「ひめゆり塔」におけるモデル事件も考察する。「八、九割フィクションである」(『ひめゆりの国』わせた書房新社、一九六九年九月)石野の作品は与那城の「短文」をもとに構想されたという。それゆえ『ゴスペル』所収の「ひめゆりの塔」と、継承される石野作品の語りの〈型〉の分析は重要となる。ここに〈悲劇の乙女〉と〈悪の軍人〉という構図が見いだせるだろう。またこの構図ゆえテクストの事実性の確認が行われることになった。

仲宗根政善『沖繩の悲劇——姫百合の塔をめぐる人々の手記』(華頂書房、一九五一年七月)や西平英夫「沖繩戦闘下ニ於ケル沖繩師範学校状況報告」(琉球遺族連合会、沖繩県立図書館蔵)、同『ひめゆり学徒隊の青春』(三省堂、一九七二年三月)も参照となる。

〈乙女〉という表象が、戦争を語る上でどのように利用されたかも考察の対象とする。戦後一九五三年から数回に渡り映画化される「ひめゆり」をめぐる物語化の主眼・目的をみることで、戦争を語る上でのセンチメンタリズムとその罪状の所在の無化がはらむ問題を分析していく。

遠藤周作の日本人基督教者としての思想——『王国への道』を中心に——

和洋女子大学大学院研究生修了 栗林 莉花

遠藤周作『王国への道』は、雑誌「太陽」に昭和五十四年(一九七九年)七月号から昭和五十六年(一九八一年)二月号まで連載され、同年四月に単行本化された。処女作「アデンまで」から数えて、一八九番目の小説である。作者遠藤周作は、その生涯を通じて、「日本人にとつての基督教」を小説を通して追求した。昭和三十年、第三十三回芥川賞を受賞した「白い人」、同年十一月に雑誌「群像」

に発表した「黄色い人」を出発点とし、昭和四一年（一九六六）三月に発表した『沈黙』で一つの頂点をむかえたが、『王国への道』は作者の日本に基督教が浸透するまでの苦悩を追う一連の追求の線上にある作品である。

『王国への道』について、これまでの研究では、山田長政に主眼が置かれ準主役であるペトロ岐部には目が向けられていない。しかし、遠藤の作品史上からみると彼がテーマを託したのは、岐部の方である。岐部は、三代將軍徳川家光による迫害の時代、船旅と徒歩でローマに渡り、司祭となつて日本で布教に励み、壮絶な殉教を遂げた「福者」である。遠藤は、『王国への道』を発表する前年の昭和五十三年（一九七八）一月から十二月まで「中央公論」に発表した評伝『銃と十字架』でより緻密に岐部の人物像に迫っている。作中で遠藤は、H・チースリックが『キリシタン人物研究』で示した正史上の岐部像から岐部のなかに人間としての苦悩を見出し、岐部の「強者」への成長の過程を示している。

小説『王国への道』、評伝『銃と十字架』に合わせ、『キリシタン人物研究』のほか、当時の日本人信徒たちの背景に在った風俗、習慣、思想に焦点を当て、遠藤が構築した岐部像に迫る。更に遠藤の「日本人にとつての基督教」というテーマと、彼のなかの「思想の変遷」の線上においての位置を示し、『王国への道』執筆当時の遠藤の理想とする日本人信徒の姿と幸福の実態を明らかにする。

【研究発表会／B会場 午後】

〈偶然〉から〈偶有〉へ——東浩紀『クオンタム・ファミリーズ』論

早稲田大学大学院生 加藤 夢三

本発表では、東浩紀の小説『クオンタム・ファミリーズ』を分析することで、その文学史的意義を明らかにすることを試みる。この小説は、物語内と物語外という二つの位相から成り立っている。先行研究においては、こうしたメタ次元とオブジェクト次元の偏差に着目することで、虚構によつて現実が転覆される構造の在り方が議論の対象とされることが多かった。

しかし、作品の中核をなすモチーフである量子力学の含意を踏まえて読みなおしてみれば、物語内と物語外の関係は、必ずしも確固とした隔たりを持つていないわけではないことがわかる。むしろ、内外で各々独立した物語世界においても、既に線形的な統合を拒むような「不気味なもの」が、登場人物のやり取りの中に挿み込まれる瞬間がある。そのような異物の表象は、〈計算Ⅱ観測Ⅱ存在〉という三位一体の解釈モデルによつて支えられており、それを基礎づけるのは「量子計算機科学」の知見である。

今回の分析では、不可知の「声」や仮想人格としての「汐子」の存在感に着目していくことで、作中の「量子家族」の運命を覆すための条件を、メタ次元とオブジェクト次元の関係に求めるのではなく、各々の物語世界を統御する論理体系の中に見いだしてみたい。その考察は、ニュートン物理学に対して量子力学が要請した「変換」の理論と相同を成すものである。

また、量子力学が情報理論の観点から大きく更新されつつある今日においては、例えば中河與一によつて提唱された「量子力学の文芸学」としての一連の論考を、不意の邂逅における〈偶然性〉（fortuity）ではなく、存在の様式に関わる〈偶有性〉（contingency）

の概念から捉えなおすことをも可能にする。『クオンタム・ファミリーズ』において、物語内と物語外の原理を水平化させる量子論的存在を跡づけていくことは、そのような「偶然」と「偶有」をめぐる近代文学から現代文学への転回を、新たに再検討する営みにもつながると考えている。

和歌の表現の巧みさをどのように翻訳するか

—『万葉集』の一首の和歌における同音異義語のはたらきを例に

京都工芸繊維大学教授 ジュリー・ブロック

日本語の文において、とりわけ和歌においては、ある表現を聞くのと読むのとでは、異なった意味が伝わることもある。歌い手たちは往々にして、対立ないし対照の効果を引き起こすべく、話し言葉と書き言葉の二つの言語域の上で戯れる。声に出して詠まれるか、あるいは黙読されるかに応じて、歌にもうひとつ別のことを言わせ、そうすることで歌い手たちは、逍遙し、逃げ去り、時には掴み難い意味の潜在性を創造するのである。このような同音異義語のはたらきを検証すべく、本発表では『万葉集』から以下の和歌を採り上げる。

うちひさす 宮道を人は 満ち行けど 我が思ふ君は ただひとりのみ

(第十一卷第二三二二番歌)

デイドロは『盲人書簡』の中で、ある盲人が、彼の精神の前（彼の眼の前ではなく）にある様々な客体を極めて「巧みな」やり方で描写する能力を持っていると言う。デイドロによれば、そうした客体の特性とは光の性質である。つまり、日常言語の様々な言葉は、

いわば客体へと直接導かれる光を生みだし、それを全ての人が共有する現実が一番共通した面で現出させる、ということである。他方、「巧みな表現」は、こうした客体に補足的な光を投げかけるものであり、その光は最初の客体の上に間接的にもうひとつの客体を映し出す。すなわちそれは、比喩の光なのである。

このような「二重化した光」というデイドロ的イメージを上に挙げた歌にも当てはめ、二つの異なる意味を含む言葉によって描き出される、現実と想像の二つの世界を明るみに出したい。これら二つの光が結ばれるところに新たな世界、つまり本来の意味で詩的な世界の次元が生みだされることを示す。

多義的な性格をもつ「してしまふ」について

台湾・静宜大学助理教授

迫田（吳）幸栄

本稿では、「してしまふ」の多義的な性格について紹介する。動詞の第2中止形（いわゆる「テ形」）+補助動詞の「しまふ」によってできあがった分析的な構造をもつ一単語なみの単位である「してしまふ」は古くから、最後まで動作をおこなうことと同時に、話し手（語り手）の残念さや予想外のような感情を表現する、と指摘されてきた。

筆者は、会話文と地の文につかわれる終止的な形をとる、「してしまふ」の使用の違いから、改めて小説の地の文に焦点をあてて分析した結果、従来いわれている残念さや予想外のような表現ではなく、「登場人物がおこなった動作の実現にたいするかたまり手（登場人物）の強調」をあらわす意味・機能があることを発見した。

一方で、「してしまふ」がつかわれる「すると」の形（条件形）をとるつきそい文をもつあわせ文（複文）、「してしまふと、く。」の場合では、「すると」の形をとるつきそい文の述語「してしまふ」

は、その動作を内包する活動の区切りとなる動作をさししめし、ある場面で小さな区切りをつける機能をもつ」と規定することができ
る。

つまり、終止的な述語につかわれる場合と中止的な述語につかわれる場合とは、かなりこととなる性格をもつ「してしまう」が存在し、単なる文のことなる位置につかわれているという機能的な違いにより生じた現象ではないといえる。両者を比べると、一方は、補助動詞の「しまう」が本来もつ語意的な意味（おわりまでおこなう、完了）がよりつよくのこり、終止形の「してしまう」とほかの形（中止形や条件形などその他）をとる「してしまう」は単に機能上の違いではなく、タイプのことなる「してしまう」としてとらえられる可能性を示唆している。

